

高鍋町）に転封され、秋月での歴史に幕をおろしました。この縁から、高鍋町と本市は姉妹都市協定を結んでいます。

秋月種実は、領内でのキリスト教布教に対し寛容でした。宣教師であるガスパル・ヴィレラを当時の足利將軍のもとへ案内したダミアンも、秋月の出身です。秋月氏の転封以降、秋月は小早川氏の領地となります。その後は黒田氏の領地となり、黒田如水（官兵衛）の弟である黒田直之が治めました。直之は熱心なキリシタンとして知られ、秋月城跡から出土した罪票付の十字文軒丸瓦は直之に関連するものと考えられています。秋月や上秋月には教会がつくられ、最盛期のキリシタンは数千人規模に及んだといひます。



室町時代初頭には、黒川と佐田の山間部に彦山の座主（僧侶のトップ）の居館・黒川院が構えられます。元弘三・正慶二（一三三三）年に後伏見天皇の第六皇子・長助法親王が座主となり、翌年に黒川院を造営、豊前の宇都宮氏の娘を妻に迎えました。以降、世襲制で二五〇年にわたって山岳修験の宗教都市として繁栄しました。発掘調査では、礎石をもつ建物跡や外国製

の陶磁器類が発見され、山中でも大型の建物がたち、海外の希少な交易品を手に入れられる財力を有していたことがわかっています。

近世（江戸時代）

関ヶ原の戦いの功績により、黒田長政は筑前国を与えられ、福岡藩を立藩します。また、不仲であった豊前の細川氏を警戒し筑前六端城を築き、杷木志波の麻氏良城（左右良城）は、父・黒田如水からの重臣である栗山利安に預けました。栗山利安は黒田如水の没後、その菩提を弔うため杷木志波に円清寺を建立しました。

元和九（一六二三）年、黒田長政の三男・黒田長興は夜須・下座・嘉麻三郡のうち五万石を与えられ、福岡藩の支藩として秋月藩が成立します。長興は現在の秋月中学校に表御殿（役所）を、梅園に奥御殿（藩主の邸宅）を構え、堀や石垣を設けて陣屋形式の城郭を造ります。表御殿の本門（黒門）に通じる坂は瓦坂と呼ばれ、土砂の流失を防ぐために瓦を縦に突き刺して並べていることからその名がつけました。黒門は明治時代に藩祖・長興を奉る垂裕神社が建立されたことで現在の位置に移築されましたが、秋月城の裏門で



ある長屋門は、現在も江戸時代と同じ位置に建っています。また、長興は城下町の整備のほか、防衛上の観点から新八丁峠を通る経路の開削を行い、秋月街道の付け替えを実現しました。

八代藩主の黒田長舒は、その功績から秋月藩中興の祖と称されています。藩財政回復のため、特産品（元結・寿泉苔・葛粉など）の開発を奨励し、七代藩主黒田長堅が学問所として設けた「稽古亭（後に稽古館）」を藩校として発展させるなど、藩内の産業や学問・文化の発展に努めました。秋月の目鏡橋も長舒の時代に着工したもので、秋月藩が長崎警備に就いた際、長舒が長崎で目にした石造アーチ橋を参考にしたとされています。完成してから現在まで一度も崩れたことがなく、平成初期までは橋の上を車が通っていました。

斎藤秋圃は長舒によって秋月藩のお抱え絵師となりました。鹿の絵を得意とし、「鹿の秋圃」と評され、『島原陣図屏風』の制作にも携わったとされます。長舒自身も絵を好み、「蘭室」の雅号で『岩に鶴鶴図』という作品を残しています。長舒に見出されて秋月藩医となった緒



方春朔は、日本で初めて種痘の方法を確立した人物として知られます。春朔は『種痘必順弁』

を著し、多くの弟子に種痘法を伝授して全国の医学の発展に貢献しました。春朔が天野甚左衛門の子どもたちに種痘を実施した二月一日日は、現在、予防接種記念日となっています。

長興から始まった秋月藩は二代長徳まで続き、歴代藩主のお墓は古心寺に建てられました。現在、秋月は「秋月伝統的建造物群保存地区」として国の選定をうけ、地域の人々の協力によって町並みが守られています。

江戸時代、甘木は博多や姪浜に次いで人口が多く、秋月街道・日田往還の要衝であったことから人馬の往来も盛んな町でした。人やモノが行き交う中で様々な産業が発展し、甘木絞りや幟旗などの染色工芸品の生産や、飴・砂糖の生産が盛んに行われ、特産品として広く流通しました。経済的・政治的に重要な甘木は、福岡本藩が治めました。

三奈木は、福岡藩の大老・黒田一成を初代とする三奈木黒田家が治めました。一成は有岡城で黒田如水を助けた加藤重徳の息子で、この縁から黒田の姓を賜り、長政と兄弟のように育てられました。領内には別邸（御茶屋）が建てられ、鵜飼見物に來た福岡藩主が滞在したこともあったようです。現在、旧三奈木黒田家庭園として、市指定名勝になっています。

近代（明治・昭和時代）

明治四（一八七一）年七月、廃藩置県により秋月藩は秋月県となり、四ヶ月後の十一月には福岡県に統合されました。家臣たちは、家禄を失い、仕えるべき藩主も失い、士族と呼ばれるようになります。九州の一部士族の中に、明治政府の政策に反発する動きが生まれ、秋月でも明治九（一八七六）年に旧秋月藩士の宮崎重之助や今村百八郎らを中心に秋月の乱が勃発しますが、豊津藩士との決起が失敗し鎮圧されます。明治一〇（一八七七）年の西南戦争で明治政府が勝利し、以降は明治政府によって近代化が進められました。

明治く大正時代にかけて朝倉軌道や両筑軌道、三井電気軌道などが開設され、人々の往来はより活性化します。朝倉軌道は、現在の三八六号線とほとんど同じルートにあり、最終的に二日市から杷木まで延長しました。田主丸く秋月間を繋ぐ軌道は両筑軌道と言ひ、現在もその橋脚の一部が残っています。昭和一四年には国鉄甘木線（現在の甘木鉄道）が開通、朝倉軌道は廃線となり、三井電気軌道は西鉄電車と合併しました。また、明治一〇年代になると寄合の場と



して公会堂が設立されるようになり、比良松に本市初の公会堂・舒翠館が建てられました。甘木の希声館は明治二二年の設立で、勝海舟が揮毫したと伝わる「希声館」の扁額が残されています。

大正八（一九一九）年には、現在の三井郡大刀洗町・朝倉郡筑前町・朝倉市にまたがる飛行場、大刀洗陸軍飛行場が建設されます。以降、軍関係施設の建設が進み、昭和初期には東洋一の飛行場と言われました。激化する戦争の中で、大刀洗飛行場に襲来した米軍機の爆撃により、頓田の森に避難していた立石国民学校の児童三一名が亡くなりました。この出来事は「頓田の森の悲劇」として、今に語り継がれています。

戦後、バスの運行が始まったことで、甘木・朝倉・杷木の各町ではバスセンターを中心に銀行や商店、映画館などができ賑わいました。甘木では、門前町を基礎とした商店街がアーケード付の商店街に発展し、夜市も開かれました。



朝倉市ホームページ
あさくらの歴史